

令和7年度水稻作柄現地調査報告書

令和7年9月
一般社団法人北海道農産協会

【調査月日】 令和7年8月25日～27日

【調査先】

- ◎道南・道央南部班：北斗市(道南農業試験場)・七飯町・厚沢部町・今金町・蘭越町・厚真町・長沼町・岩見沢市(中央農業試験場水田農業部)
- ◎道央北部・道北班：中富良野町・東川町・旭川市・比布町(上川農業試験場)・名寄市・士別市・深川市・留萌市・新十津川町・美唄市・当別町
(各市町のほ場は、現地優決ほ場、共励会受賞者ほ場を中心に調査)

【参加人数】 約30名(部分参加含む)

【総合検討会】 令和7年8月27日 空知農業会館4F 大会議室A

本年度の標記調査は2泊3日で実施され、調査ほ場には令和6年度優良米生産出荷共励会の最優秀賞受賞者のほ場を加えるなど、より充実した形での現地調査となりました。本調査の実施にあたりまして、道農政部・各地の農業改良普及センター・道総研農業試験場・地区米麦改良協会など関係機関の皆様から特段のご協力・ご配意を頂きましたこと、厚くお礼申し上げます。

気象経過と水稻の生育状況

(1) 育苗期

- ・3月は高温で推移し降雪量も少ない傾向だったため、融雪期は平年並～早くなりました(一部、檜山北部地域では3月末の大雪により融雪が平年より遅れました)。
- ・4月中下旬の断続的な降雨の影響により、耕起作業の遅れや乾かない状態で耕起されるほ場が目立ちました。
- ・移植時の苗質は、育苗中盤以降、気温が高く推移したため、順調に生育しましたが、やや徒長傾向の苗もありました。

(2) 移植・活着期

- ・移植作業は平年並に行われました。しかし、5月5半旬に移植したほ場で低温寡照となった地域では、植傷みや活着不良が散見されました。その一方、早めに移植された苗(5月20日以前)は、活着良好で生育停滞期間も短く、順調に生育しました。

(3) 分けつ期

- ・5月6半旬以降、好天に推移したため、分けつ始はほぼ平年並に回復し、7月1日現在の茎数は624本/m²(平年比107%)になりました。

(4) 幼穂形成期～冷害危険期

- ・生育は順調に推移し、幼穂形成期は6月25日で平年より3日早くなりました。前歴期間、冷害危険期は、期間を通して高温で経過し、一時的な日照不足や降雨があったものの、不稔の発生は平年並～下回るものと考えられます。

(5) 出穂期から登熟期

- ・7月に入ってからも高温傾向は継続し、7月15日の莖数は584本/m²（平年比97%）になりました。高温により生育が進んだことから、穂揃性はやや良好の地帯が多くなりました。
- ・出穂期は7月19日で、平年より5日早くなり、開花・初期登熟も順調に進みました。しかし、8月中旬以降の断続的な降雨により、各地でなびきや倒伏が発生し始めました。8月15日時点の莖数は580本/m²（平年比97%）となりました。
初期分けつの確保がやや遅れ、高節位の分けつも含めた穂数確保となりましたが、その後の高温で幼穂の発育も順調であったと考えられ、一穂粒数を確保し、平年並の稔実粒数になることも予想されます。このことは普及センターで行われています「作況ほにおける収量構成・決定要素調査」で次第に明らかになってくると思われま

【道南地域の状況（北斗市・七飯町・厚沢部町・今金町）】

- ・4月中下旬～5月初旬の断続的な降雨の影響で、耕起作業が平年より5日前後遅れた地域が多かった。
- ・育苗期間中の高温による徒長化の軽減や、は種時期の天候不順の回避の他、地域により密播中苗方式が近年増加した理由もあり、は種時期を数日遅らせた事例が多かった。
- ・は種時期は低温寡照もあり、出芽が平年より3日程度遅れた。その後、5月に入り高温多照となったため苗の生育は順調に進んだ。
- ・移植作業は概ね平年並に進んだが、移植直後の5月5半旬に低温寡照や強風の影響で植傷みが生じて活着がやや遅延したため、分けつ始は平年より2日程度遅れた。
- ・6月2半旬以降、天候が回復して高温多照となったため生育は前進したものの、初期生育の遅延が影響し、6月15日時点の莖数は平年を下回る地点が多かった。
- ・一方で、幼穂形成期は道南全体で平年より3日早く（作況「ふっくりんこ」（北斗市、七飯町、厚沢部町）、「ななつぼし」（北斗市、今金町）では平年並～3日早まった。
- ・幼穂形成期以降も気温が高い日が続き、さらには6月下旬～7月初旬と中旬頃が寡照条件となったため徒長し、草丈は平年より長くなった。
- ・高温により生育はさらに進み、出穂期は平年より5～7日早まり、穂揃日数も3日程度と短期間で出穂した。
- ・登熟期間中、気温は平年よりかなり高めで経過し、日照時間は総じて平年を上回っており、登熟は良好に推移した。
- ・8月15日時点の穂数は、平年並～少なくなった。移植直後の低温寡照による初期生育の遅れと6月中旬からの高温で生育が前倒しになったことで、幼穂形成期も平年より早く生殖生長に移行したため、穂数が確保できなかったと推察される。
- ・冷害危険期間中は低温遭遇を回避したため、不稔は平年並～やや少なかった。一穂粒数はほぼ平年並だった。
- ・稈長は平年並～やや長かった。8月4半旬頃の集中的な降雨により一部のほ場で倒伏が生じた。その後の降雨で倒伏は漸進的に拡大しているほ場も見られる。
- ・高温により登熟が進んだため、成熟期は平年より10～12日程度早まる見込みである。収穫作業は8月下旬頃に一部が始まったが、概ね9月初旬から本格的に始まる見通しと

なっている。

- ・病虫害の発生状況は、いもち病の発生は見られず、紋枯病・疑似紋枯症が一部地域で散見されているものの要防除水準に達したほ場は少なかった。葉鞘褐変病や褐変穂の発生が厚沢部町や今金町方面で見られたものの、発生程度は軽微であった。高温により斑点米カメムシの発生量は多かったが、防除が適切に実施されたため被害は少ない傾向にあった。



北斗市 道南農業試験場にて



七飯町 優良品種決定現地試験ほにて



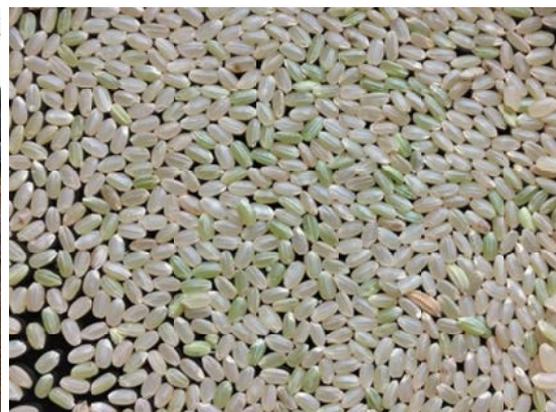
厚沢部町 優良品種決定現地試験ほにて



厚沢部町 優良品種決定現地試験ほの生育状況



今金町 優良品種決定現地試験ほにて



適期刈取サンプルの玄米品質(檜山農改提供)

【道央南部地域の状況（蘭越町・厚真町・長沼町・岩見沢市）】

- ・ 4月中下旬の断続的な降雨により、耕起作業は平年より遅れた。
- ・ は種作業は平年並に行われたが、4月下旬の低温寡照により出芽に時間を要した。気温は5月2半旬から平年より高く推移したため、苗の生育は回復し平年並の苗質を確保した。
- ・ 移植後、5月下旬～6月上旬の低温寡照により活着はやや遅れた（蘭越町、厚真町、岩見沢市）。また、6月15日時点の茎数は平年を下回った。長沼町は移植後の気象条件が活着に影響するほどではなかったため、順調な生育であった。
6月2半旬以降は高温で推移したため、全地域で生育は進み、茎数は平年を上回った。
- ・ 幼穂形成期は平年より1～3日早かった（作況「ななつぼし」）。
- ・ 出穂期は全地域で平年より5～7日早くなった。
- ・ 8月15日時点の茎数は、平年並からやや少なかった。6月中旬以降は高温が続き、生育の前進化による栄養生長期間の短縮や初期生育不良地域では、遅発分げつが無効化されたためと考えられた。
- ・ 穂揃い性は良く、登熟は良好である。
- ・ 穂数は平年並からやや少なく、一穂粒数は平年並だった。不稔歩合は平年並からやや少なく、稔実粒数は概ね平年並だった。
- ・ 稈長は平年より長いため、8月中旬以降の降雨も影響し倒伏が散見された。
- ・ 収穫作業は8月中に一部始まっているが、9月初旬から本格的に刈り取りが開始されると見込まれ、平年よりかなり早くなると予想された。
- ・ 病害虫の発生状況は、いもち病の発生はほぼなく、紋枯病・疑似紋枯症が全地域で散見されているものの要防除水準に至っているほ場は少なかった。褐変穂の発生は少なかった。高温によりカメムシの発生量は多かったが、適切な防除により被害は少ない見込まれた。



蘭越町 優良品種決定現地試験ほにて

蘭越町 優良品種決定現地試験ほにて



厚真町 優良品種決定現地試験ほにて



厚真町 優良品種決定現地試験ほにて



長沼町 優良品種決定現地試験ほにて



岩見沢市 中央農試水田農業部にて

【道央北部地域の状況（深川市・新十津川町・美唄市・当別町）】

- ・ 4月中下旬の断続的な降雨の影響で、耕起作業は平年より遅れた。
- ・ は種作業は概ね平年並に行われており、移植時の苗質は育苗中盤以降、気温が高く推移したため、順調に生育し概ね平年並の苗となった。ただし、一部では徒長傾向の苗も見られた。
- ・ 移植後は低温寡照となったものの、初期茎数の確保に大きな影響はなく順調な生育だった。
- ・ 6月中旬以降の高温で生育は進み、幼穂形成期は深川市、新十津川町で1日早く、美唄市、当別町では3～4日早くなった。
- ・ 出穂期は全地域で平年より4～8日早く地域差が大きかった。
- ・ 8月15日時点の茎数は、新十津川町は平年より多くなるも、他地域では平年並からやや少なくなった。6月中旬以降の高温傾向が続いたため、生育前進化による栄養生長期間の短縮や初期生育不良地域では、遅発分げつが無効化されたためと考えられる。
- ・ 穂揃い性は良く、登熟は良好である。
- ・ 穂数は平年並からやや少なく、一穂粒数は平年並だった。不稔歩合は平年並からやや少なく、稔実粒数は概ね平年並だった。
- ・ 稈長が平年より長いため、8月中旬以降の降雨も影響し倒伏が散見された。降雨などにより今後の倒伏も懸念される。

- ・収穫作業は8月下旬より一部始まっているが、9月初旬から本格的に刈り取りが開始される見込みであり、平年よりかなり早くなる。
- ・病害虫の発生状況は、いもち病の発生はほぼなく、紋枯病・疑似紋枯症が全地域で散見されているものの要防除水準に至っているほ場は少ない。カメムシの発生は高温により多くみられたが、適切な防除が実施された事により被害は少ない見通しである。



深川市 優良品種決定現地試験ほにて



新十津川町 優良品種決定現地試験ほにて



美唄市 優良品種決定現地試験ほにて



適期収穫判定会に持ち込まれたサンプル(美唄市)



当別町 優良品種決定現地試験ほにて

【道北地域の状況（中富良野町・東川町・旭川市・名寄市・士別市・留萌市）】

- ・ 4月中下旬の断続的な降雨の影響で、耕起作業が遅れているほ場があった。
- ・ は種作業は概ね平年並に行われており、移植時の苗質は育苗中盤以降、気温が高く推移したため、順調に生育したが、やや徒長傾向の苗もあった。
- ・ 移植後、低温寡照となった地域（東川町、名寄市、留萌市）では、植傷みにより活着に時間を要し、6月15日時点の茎数は平年を下回った。他の地域（中富良野町、旭川市、士別市）は、移植後の気象条件が活着に影響するほどではないため、順調な生育だった。6月中旬以降は、高温により全地域で生育が進み、茎数は平年をほぼ上回った。
- ・ 幼穂形成期は中富良野町、東川町、名寄市、士別市で平年より3～4日早く、旭川市、留萌市はほぼ平年並だった（作況「ななつぼし」（名寄市は「はくちょうもち」以下同じ）
- ・ 出穂期は全地域で平年より5～7日早くなった。
- ・ 8月15日時点の茎数は、平年並からやや少なくなった。6月中旬以降の高温が継続されたため、生育前進化による栄養生長期間の短縮や初期生育の不良地域では、遅発分げつが無効化されたためと考えられる。
- ・ 穂揃い性は良く、登熟は良好である。
- ・ 穂数は平年並からやや少なく、一穂粒数は平年並だった。不稔歩合は平年並からやや少なく、稔実粒数は概ね平年並だった。
- ・ 稈長が平年より長いため、8月中旬以降の降雨も影響し倒伏が散見された。ただし、士別市、名寄市の倒伏は極一部であり、他地域より発生程度は低かった。
- ・ 収穫作業は8月中に一部始まっているが、9月初旬から本格的に刈り取りが開始される見込みであり平年よりかなり早くなる予想である。
- ・ 病害虫の発生状況は、いもち病の発生はほぼ無く、紋枯病・疑似紋枯症が全地域で散見されているものの要防除水準に至っているほ場は少ない。褐変穂の発生が名寄市で散見された。カメムシは高温により発生量は多かったが、適切な防除により被害は少ない見込みである。



中富良野町 優良品種決定現地試験ほにて

東川町 優良品種決定現地試験ほにて



令和6年度共励会最優秀賞受賞の笠井氏ほ場にて
意見交換(笠井氏は中央)

旭川市 優良品種決定現地試験ほにて



上川農試 作況ほ「ゆめびりか」



名寄市 農作物生育状況調査ほにて



士別市 優良品種決定現地試験ほにて



留萌市 優良品種決定現地試験ほにて

【道東地域の状況（北見市）】 ※調査日9月4日

- ・は種作業は平年並に行われた。出芽は良好で、育苗期間中は4月下旬を除き高温で推移した。
- ・移植作業は平年並に進んだが、降雨や作業競合により移植終はやや遅れた。
- ・5月6半旬及び6月1半旬の低温により、一部のほ場で植傷みが見られたが、6月2半旬以降は気温が高く、茎数は多く推移し、生育は進んだ。
- ・7月は気温が非常に高くなり、出穂期は平年より7日早い7月19日だった。
- ・登熟や品質への影響を最小限にするため、出穂期以降も可能な限り入水を続け土壌水分の保持が図られた。
- ・穂揃い性は良く、登熟は良好である。
- ・穂数及び一穂粒数は平年並だが、ほ場間差もあり総粒数は平年並～やや少ない。
- ・稈長が平年よりやや長いため、8月中旬以降の降雨により倒伏が散見された。
- ・8月も気温は平年より高く経過したため、収穫始は平年より11日早い8月31日だった。
- ・品質は収穫初期の玄米に限られるが、胴割粒の発生は少なく良好である。
- ・病虫害の発生状況は、イネドロオイムシの発生が例年より多く、一部の地区では6月下旬に急激に発生量が増加し、葉の食害が非常に目立った。いもち病の発生はなかったが、紋枯病が散見されている。



北見市 優良品種決定現地試験ほにて
「きたふくもち」



北見市 農作物生育状況調査ほにて
「きたゆきもち」

【総合検討会における協議事項について】

1 はじめに

両班による調査終了後、道農政部（上川農試駐在）小泉上席普及指導員を座長とする総合検討会を開催し、本調査のまとめと課題整理を行いました。

2 今後の重点対策

(1) 整粒歩合を高めるため、3つの重点項目に取り組みます。

- ・成熟期が近づいたら、こまめに試し刈りした上、丁寧に玄米判定を実施して収穫適期を正確に判断する。
- ・刈り遅れによる品質低下（茶米、サビ米、胴割粒など）を招かないよう適期に収穫する。
- ・品質向上のため、倒伏が発生しているほ場、白未熟粒、胴割粒の混入が見込まれるほ場、いもち病被害が大きいほ場等は別収穫を行う。
- ・二段乾燥と丁寧な調製を行い、胴割粒の発生を防ぐ。
- ・異品種混入を防止するため、作業場や機械の清掃を行うとともに、計画的に作業を進める。

(2) 倒伏・病害発生ほ場における収穫作業のポイント

- ・倒伏した部分は、「追い刈り」でコンバインの作業速度を落として丁寧に刈り取る。また、倒伏した部分の籾と通常の籾を一緒にすると、品質低下を招くおそれがあるため別収穫とする。同様にいもち病等の被害部分も別収穫し、品質の劣った米が混じらないようにする。
- ・倒伏面積が大きいほ場では、重なり合った部分は乾きにくく籾水分も高いため、収穫乾燥作業に時間を要する。また、倒伏部分は登熟も緩慢となり品質の低下が見込まれるため、その点を留意して作業を行う。

(3) 胴割粒の発生防止対策

- ・発生要因として、刈り遅れによる主稈の水分低下があげられる。収穫期の降雨や籾水分が25%以下になると発生のリスクが高まるため、適期収穫に努める。特に遅れ穂の登熟待ちは発生を助長するため、こまめな玄米判定による適期収穫を励行する必要がある。
- ・また、乾燥初期の水分が高いうちに急激に乾燥させることにより発生が助長される。このため、穀温はできるだけ低くすることが望ましく、乾燥開始時は40℃以下（毎時乾減率が0.5%～0.6%程度）になるよう設定する。籾水分が25%未満になったら、通常の温度で乾燥（毎時乾減率が0.5%～0.8%）を行います。二段乾燥は「胴割れ」の発生を防止する重要な技術なため積極的に取り組みます。過乾燥も胴割れの発生を助長するため、玄米水分14.5%～15.0%で仕上げる。